



強風に耐える

架空ケーブル特に自己支持形ケーブルの最大の敵は風である。自己支持形ケーブルが近年急速に発達したかげには、強風下での振動による断線などの問題を解決するための多くの改良がなされてきた。

まず、風圧抵抗を減少させるという見地からは、窓明きヒョウタン形ケーブルが開発された。これはケーブル本体とワイヤを同時に押し出して一体化するとともに、その連結部に一定間隔の窓をあけたものである。また、この構造は架線、保守作業の能率化にも貢献している。

一方、力学的な振動防止の見地から二ヶ撚形が開発されたが、製造工程の簡略化と架線効率をあげるために、形状の改善をはかったのがヘリカルヒョウタン形ケーブルである。すなわち、一体に被覆されたケーブル本体とワイヤが、あらかじめ工場で一定のピッチでより合わされたものである。

最近では、金属シースや大サイズケーブルの需要に対処して、画期的な製造法による新しいヘリカルヒョウタン形ケーブルを開発した。

その特徴を構成する特許は、プラスチック押出機内の心、口金を交互に回転させ、ワイヤにケーブル本体を左右に巻きつけながら、両者を同時被覆する製造法である。

このような独特の製造法による反転ヘリカルヒョウタン形ケーブルは、強風時にも顕著な振動防止効果があり、また、要求される過酷な諸条件にもすべて対応可能とするものである。(写真は、長期架設試験中のタフレックスシース(波付金属シース)反転ヘリカルヒョウタン形ケーブル)